

而してかゝる發註統制權限の公定に伴ひ、請負業者に對する全國總
工事の割當統制權の如きものも、自然一元的に運營行使することを得
るものと信ずるものである、又資材、勞務、資金等の一元的統制力の
綜合的擴充は元より、資材勞務の現調整令の適用に關し、施工能率増
進上今一層適正なる特別措置を講し得るものと考へられるのである、
更に進んで左の如き希望事項の實現を達成することを得ば幸ひ之れに
如かざるものと考ふるものである。

希望事項

- 一、土木建築請負業者の施工期限勵行に對する報獎制度の確立
- 二、工事の損失補償制度の確立

印度の歴史産業交通の概況 (一)

H T 生

- 三、國家的工事に對する資金の融通並に前渡金交付制度の確立
- 四、完全施工の推進力、即工事全般並に下請業者の生活内容に互り査
察制度の確立
- 五、工事竣工保險制度の確立
- 六、工事紛争調停法の確立

以上は従來請負業者が餘りに企業者側との間に偏務的契約と情實的
慣習とに忍従、拘束せしめられたる結果容易に改善することを得ざり
し事項なれども、苟くも統制業務の遂行上業者をして國策に協力せし
め、其の所を得せしめんが爲には喫緊缺くべからざる重要方策の一端
なりと信じ將來充分檢討を要すべき問題なりと思ふものである。以上

印度の位置と地勢

忍從三百年、印度民衆四百億が多年の宿望である英國を打破して完
全なる獨立のために、スバス・チャンドラホース氏を首班として自由
印度假政府がその逞しい生誕をしたのは、赤道直下の昭南島に於いて
昭和十八年十月二十一日のことであつた。東條首相は印度人の印度達

成のために飽くまでも實力を以てこれ支援することを闡明し、又世界
は重視の目を以て印度問題を凝視して居る。暴英打倒印度解放の戦ひ
は今やその機至り、精銳無比の皇軍を主體として假政府の國民軍は驚
らに進軍を開始して、デリーへデリーへと各所に敵を破撃しつつある
壯舉は正に史上の一紀劃たると共に、印度は既に長夜の眠より醒めた
曉鐘の耳朶である。茲に廳ては吾々と一心一體に團結して大東亞建設

の一翼を擔ふべき印度の歴史、産業、交通等の概況を見て置くことは敢て徒爾ではないと思惟するのである。偕て印度と云ふ言葉はインダス河のインダスから來てゐることであるが、この印度は吾々には釋迦、即ち悉達太子の生れたところとして親みがあり、天竺なる言葉は遠く昔から我が國民に聞こえて居る。地理的に見る印度は亞細亞大陸の中央部から南方洋上に向つて突出する一大半島で、北部は世界の屋根と云はるゝヒマラヤ山脈とカラコルム山脈とによつて西藏高原及び中央亞細亞に接し、西はアフガニスタン及びイランの兩國に連なり、東は既に共榮圈内に入る緬甸に接し、南は現下波羅舘くベンガル灣とアラビア海に臨んで居る。かくて印度は東西南北共に延長約三千料に達し、又陸境六千四百料、海岸線六千料を持つてセイロン、ネパール北カシミール等を加へるとその面積は四百八萬平方料に達すると云はるゝから、蘇聯邦を除いたる歐洲全體と略は同様であつて、我國の領土の六倍以上に當つて居る。而してその地勢は西にインダスと、東にガンジス及びブラマプートラの三大河が流れて廣大なる平野を展開して居るが、この平原の北はヒマラヤ山岳地帯であり、南部の半島地方にはデカン高原地帯を形成して居る。氣候はヒマラヤ山壁以南の全地域は熱帶的モンスーン型を示して居るが、大體熱帶的氣候を保持して居るも、印度の地域が廣大且つ地形も複雑なるために實際の氣候は多種多様である。

印度の人口と言語と宗教について

印度の人口は最近精確なる統計がないために精密を缺く恐れあるも、大體千九百四十年の推定人口は緬甸を除いて約三億七千七百萬と云はるゝから、世界人口の比較率は約六分の一にして我國の人口の三倍半強、米國人口の二倍半餘、蘇聯邦を加へたる歐洲人口の約三分の二に達し、この總人口中英領印度に住居して居るものは約七割六分にして、他の二割四分が藩王諸國に住んで居る有様である。人口の點では全く支那に次ぐ世界の第二位にある。而して人口の密度は一平方料八十八人を示して、歐洲平均密度の四十六人の二倍に近く、殊にベンガル州の如きは一平方料當り二百三十七人にして我國本州の二百三十一人と略ほ同様である。而してこれ等の人口分布は主として農村を中心とすることは大いに注目すべきところである。若し夫れ言語と宗教關係に至つては印度は大陸的性格に於いて住民、言語、宗教は最も複雑を極めて居ることは現在印度に行はれてゐる言語は實に其の數百二十五種以上と云はれ、地方郵便局にて公認されたものだけでも七十餘種に及ぶとのことで想像することが出來得るのである。人種も亦亞細亞の各方面から異質の人種が長年代に互つて、後から後からこの地に推し寄せたるがために入り交つて錯綜混淆を示して居るが、大體印度アリアン、アリヨ・ドラウイデアン、ドラウイデアン、モンゴロ・ドラウイデアン、モンゴロイド、トルコイラニアン、シリ・ドラウイデアン等の七族に區別さるゝことが出來るのである。宗教に至つては元々印度は典型的の宗教國であるから、宗教を離れて印度の歴史、政治、社會思想、文化風俗、習慣等を見る譯には行かない程宗教は深く印度

人の骨髓にまで浸透して居るが、その種類は總人口の六八%以上の徒を有する印度教を始めとして二二%以上の回教を第二とし、更に佛教、原始教、基督教、シーク教、ジャイナ教、拜火教、猶太教等を崇拜して居る。而してその分布状態に至つては印度教徒即ちヒンヅ教徒は全人口の六割八分を占める程あつて全印度に擴がり、これに次いで回教徒は西北國境又は東部地方を主として其他各地に散在して居るが、佛教徒は緬甸、セイロンの合せて千六百五十萬を除いたら印度には僅少の存在であるかやうなるが故に、印度は人種、言語、宗教、文化等も多數の系統並に混合の形態にあるのである。

印度の歴史は五千年に互る

この印度の歴史については悠久五千年に互るものであつて、且つ極端なる複雑を極めて居るが故に、真に限りある紙面では至難であるが、印度を認識する上に於いては概略だけは是非共知つて置くの必要があると思はるゝので、各印度史を參考として摘記すれば印度最古の住民はコリアン種族とドラヴィテアン種族の二つであると云はれて居るが、其後中央亞細亞の高原地帯に住んでゐたアリアン民族は西紀前四千年の頃に二つの方向に移動を開始して、その一つは西方に向つて歐洲に入つてヨーロッパ民族の祖先となり、他は東南方に向つて西南亞細亞の各地に入つて、一部はベルシャに入つて所謂イラン文明を作り、他は西紀前二千年頃にヒンヅークーシュー山脈を越えて印度の五河地方に侵入して定住したのであるが、彼等の仕事は先住民を征服するにあ

つたが、後に牧、農、工、商の各方面に於いてかなりの文化的發展をなし、部落制度、家長制度を創立して王を首班とする大集團を組織し以て外敵に當り、政治は世襲君主制、寡頭制、民主制等々であつたが、多くの場合合議の形式を用ひて居つたやうである。而してこれは大體西紀前千年頃から七百年頃の間であつたが、印度アリアンは更に五河地方から恒河流域へと移動して、茲に波羅門中心の文化を建設して自ら中國と呼び、四姓制度、宗教的儀式の整備、波羅門の至上地位の決定、ウパニシャツド哲學の發展、其他諸科學の成立等は大體この時代に出來たのであつた。又他面政治的には部族政治から國家政治への轉換期であつて、大領土を有する大王が現出されて王權は漸次擴大され大城廓の如きも構築さるゝと共に都市の出現となつて、自然商工業も發達して諸般の律令式典も漸次備はつて國家としての態様を整へるに至つたのである。而してこの時代の初期に最も優勢であつたのはクル王國とパンチャラー王國であつた。其後現出した韋提訶國は領土は九百哩に互る大國であつて、その首都ミチラは理想的大都市あり、各國の波羅門學者を招いて學術の振興に努力したために交通の隆盛を示し、彼のヤージュニヤアルリヤの如き一大哲人も現はれたのはこの西紀七世頃であつたが、この韋提訶王朝もデヤナカ大王カラデーヤナカの時代に於いて、カーシーの阿闍世王やバジアン聯邦等と戦つて滅亡したのである。西紀前七百年から六百年は大體十六國時代であるが、この時代は所謂十六大王國の群雄割據の時代である。「以下次號」